

「未完の記譜法～言語・イメージ・身体に運動を起こす装置」の研究

「Notation 記譜法」とは、一般には、楽譜、舞踊譜など芸術諸ジャンル内の「行為の記録」（書くこと）と「再生の指示」（読むこと）を行なうものとされている。本研究「未来の記譜法 言語・イメージ・身体に運動を起こす装置の研究」においては、厳密なスコアを有したものだけでなく、「言葉・イメージ・身体」に運動を起こす流動的な「装置」として広く記譜を捉え返すことで、「記録」と「再生」とどまらない「領域横断的な創造的行為」としての記譜法の可能性を探求する。多様な感覚・技術の交通という視点からの記譜へのアプローチは、読む、書く、視る、聴くという従来の諸ジャンルに固定された「鑑賞形態」、歴史的文脈内における「作品」「作者」概念や「資料体・集蔵体（アーカイブ）」の場を転移し「創造的誤読」へと導く新たな理論と制作の実践となるであろう。

具体的実践として、本年度は「Sense/Common 装飾と犯罪」プロジェクトをPARASOPHIA 京都国際現代芸術祭2015を舞台に展開した。これは、2012年より継続している美術家・林剛に関わるアーカイブ作業をベースにしたものである。学生時代から2011年までの氏の50年以上に渡る作品、写真、メモ、ドローイング、関連記事などのデジタル化と関係者へのインタビューによる資料化である。林の仕事は、70年代から80年代にかけて、言葉で世界を構築する独自の作業として大きな展開を遂げ、当時のコンセプチュアルや関西ニューウェーブの流れとは異質で、宇宙から到来した隕石のように不穏な力を携えたものであった。その与えたインパクトの大きさに反して、氏の仕事は、美術館やマスコミが形成する正史の日本アートシーンでは亜周辺にとどまっている。そのことは86年に渡米し、それから23年の間、「平成・日本・美術」の枠外で活動していた私にとっては不可解な現象でもあった。その意味で林アーカイブの作業は私にとって、氏の思考プロセスへの接近術であるだけでなく1986年から現在に至る「平成・日本・美術」への違和感の検証でもあり、客観的な評価や研究を目的とした美術史家としてではなく、作品をそれとは相容れない平成時代の日本という場所において震えさせよということであった。

昨年度のヨコハマトリエンナーレでの《法と星座 Turn Coat/Turan Court》から京都PARASOPHIA での「Sense/Common 装飾と犯罪」への移行のプロセスでの留意点は、記憶の継承・漂白であった。横浜での赤い法廷の強烈なイメージとは対比的に、京都では真っ白に漂白された石庭・法廷のイメージとなった。京都において庭石は禪的世界の見立てというのは常套であるが、それを逆手に、観ることが出来ても見えていない対象（尖閣諸島、竹島）の形態を見立てとする石群を配した。観客は白い法廷をウラ側からくぐり抜け、迷路状の監獄を通りぬけた後、幻影としての法廷空間を鏡面上に見ながらルイス・キャロル「スナーク狩り」での白地図が散乱するバックヤードへと達する。壁面には、崇仁地区の空き地の空撮映像と強風にかき消される小学校の校歌が流れる映像（岡崎など京都の観光地を中心としたPARASOPHIAの展示を偏心させる意図で、参加アーティストのヘフナー&ザックスのプロジェクトを崇仁へ誘導するとともに、同時期開催のstill movingへも接続する目論見）。展示期間中は、鑑賞する場としてのみではなく、多様な相互作用が生まれる場としても美術館を活用するために、複数プログラムの開催やシンポジウムへの参加も行った。

2015.3.8 【シンポジウム】

「美術館を超える展覧会は可能か」

ロジャー・ブリュゲル（ヨハン・ヤコブ博物館館長/スイス）

アンドレア・バイステイン（ZKM現代美術館館長/ドイツ）

河本信治（PARASOPHIA芸術監督）

高橋悟（PARASOPHIA参加作家）

司会：神谷幸江（広島現代美術館学芸課長）

場所：ヴィラ鴨川ゲーテ・インスティテュート京都

2015.3.7 【講演】

「イリュージョン：認知と身体のリアリティー」

下條信輔（カリフォルニア工科大学教授 心理学）

司会：高橋悟＋倉智敬子（PARASOPHIA参加作家）

場所：京都市美術館

2015.4.12 【講演】

「おまかせ民主主義からの脱却」

上野千鶴子（東京大学名誉教授 社会学）

公開対談：上野千鶴子・高橋悟＋倉智敬子

場所：京都市美術館

2015.5.3 【公演】

「休日の憲法」

Shing02(MC,音楽家)

Kuranaka1945 (DJ,音楽家)

公開対談：Shing02＋高橋悟＋倉智敬子